



句集
琴弾鳥

ことばあしり

宇都宮敦子

Utsunomiya Atsuko

梅の木に琴弾鳥が来ては去る

句集名の「琴弾鳥」は鶯の別名。早春のまだ雪の残っている八ヶ岳高原。餌台に群れてはさっと引く照鶯の、頸から胸にかけての曙色に感動した。（著者「あとがき」より）

俳句317句+エッセイ15編収録

梅が香や悪ぶることも猿の芸

遠野火を神話のやうに見てをりぬ

篝火の渦巻く枝垂桜かな

東海の砂に尻据ゑ風を引く

淡雪や厠に江戸の美人絵
図

熊蜂のたしかな羽音
戒壇院

悪人などをらず草餅分けあへば

良寛像膝に分厚き春の雪

暴悪面近江にありて花明り

水耕の根を白く吐く春の闇

鹿茸ろくじようの岐れはじめの瞳濡れ

坐りよき松の根に待つ団扇撒

雲荒き琵琶湖の鮎の一夜干し

叡山の入り日が響く麦の秋

小梨咲く女の強さ面に出ず

曹達水シユワツと何か失へり

あめんぼの水輪踏み合ふ遊びかな

鳥籠のやうな四阿麦嵐

潮騒のにはかに近し夏の蝶

いくたびも老鶯鳴けり鑑真忌

野
花
菖
蒲
穹^{そら}
に
蕾
を
引
き
絞
る

桑
の
実
が
旅
の
く
ち
び
る
青
く
す
る

大
皿
の
模
様
の
や
う
に
舌
舐

穴
子
ば
か
り
食
つ
て
を
り
た
る
顔
で
あ
り

海^ほ鞘^やさげてヨーヨーほどの重さかな

切株のとぐろに似たる木下闇

鎧ひたる騎士の風格夏館

極まれば蟬天網をはじくなり

灼け砂に散らばつてゐる虫の骨

黒蝶のきらり矢倉へ吸はれけり

やはらかきもの間まへをり蟻の穴

踏んで脱ぐ水着に草の匂ひかな

夏服の大きなカフス指揮をとる

海の日やペンギンの列艦を出る

初風に吹かれつ畳む鷺の羽

蟪蛄の細いところを掴みけり

牛乳を噴きこぼしけり葛あらし

いぼむしり己の影を驚擱み

スリッパにおのづと左右居待月

実柘榴の小部屋小部屋の笑ひ声

秋の風櫛の洞に行き止まる

鉄棒に桜紅葉の降り止まず

縞^{しま}枯^が山^れに吹きくる霧のかたさうな

峡の奥より晩^お稲^く田^ての広がり来

コスモスの揺らぎに長き塔の影

火の恋しアンモナイトを卓に置き

兜煮をせせりてをれば時雨過ぐ

ロンドン

小鬼駆け出す篠懸すずかけの落葉かな

文鳥の籠を冬日に髭男

新しき障子明りに赤ん坊

明暗の混沌として降誕祭

隣国の文字まだ読めず冬銀河

著者略歴

宇都宮 敦子 (うつのみや・あつこ)

- 1935年 盛岡市で生まれる
戦時中は父の故郷・伊賀上野に疎開していた
- 1995年 俳誌「弾」に入会、高島茂に師事
- 1999年 茂没後、俳誌「あを」の句会に参加、現在に至る
- 同年 俳誌「鳴」入会、伊藤白潮主宰に指導される
- 2007年 超結社の晩紅塾句会に四年間参加、八田木枯の影響を受ける
- 2009年 俳誌「紹」(代表星野恒彦)の誌友となる
- 2011年 俳人協会会員
- 2012年 鳴新人賞受賞
- 2014年 第一句集『錦玉羹』刊行
- 2017年 鳴賞受賞

現在 「鳴」同人 「紹」同人

句集 琴弾鳥

2020年2月14日 第1刷発行

著者 宇都宮敦子

発行者 池田友之

発行所 株式会社ウエップ

〒150-0022 東京都新宿区新宿1-24-1-909

電話 03-5368-1870 郵便振替 00140-7-544128

印刷 モリモト印刷株式会社

※定価はカバーに表示してあります ISBN978-4-86608-093-2

著者略歴

宇都宮 敦子 (うつのみや・あつこ)

- 1935年 盛岡市で生まれる
戦時中は父の故郷・伊賀上野に疎開していた
- 1965年 俳誌「雫」に入会、高島茂に師事
- 1999年 茂没後、俳誌「あそ」の句会に参加、現在に至る
- 同 年 俳誌「鳴」入会、伊藤白潮主宰に指導される
- 2007年 超結社の晩紅塾句会に四年間参加、八田木枯の影響を受ける
- 2009年 俳誌「韶」（代表星野恒彦）の誌友となる
- 2011年 俳人協会会員
- 2012年 鳴新人賞受賞
- 2014年 第一句集『錦玉糺』刊行
- 2017年 鳴賞受賞

現在 「鳴」同人 「韶」同人

現住所 〒336-0021
さいたま市南区別所5-9-18

句集 琴弾鳥